幻想のアルカナ

名無しの権兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想のアルカナ

【Ｎコード】
Ｎ９１０９Ｙ

【作者名】
名無しの権兵衛

【あらすじ】
最強冷酷、クー＆ヤンデレヒロインがとにかく暴れる物語。チート、ハーレム要素あり、また厨二という単語にピンときた方はぜひいらしてください。
痛々しいくらいの厨二をお送りしますので。
魔術師――それは己が願い、祈りを顕す術を会得した者らの総称。
彼らは己が願望を成就させるためならば如何な犠牲をも厭わず、何ものをも顧みない。彼らはそういう存在であるがゆえに。
これはそうした異端者が紡ぐ、幻想の物語――

第零話

夜。

街は寂とした空気に包まれていた。

日中は舗装された道路に忙しなく車が往来し、歩道には人の列が途切れることなく行き交い続ける。そんな人波の喧騒と車の騒音が街中を埋め尽くす栄えた都市は、けれどこうして夜が訪れるとスイッチが切り替わったかのように人が消え、音は途絶え、深閑(しんかん)となる。

――ゴーストタウン。

簡易的な例えでこの街の様相を表現するなら、その言葉がもっとも適しているだろう。

そんな凍りついた街を俯瞰(ふかん)する、天を刺さんとそびえ立つ摩天楼(まてんろう)。その屋上のフェンスの向こう側に、一人の少年が座していた。

風にはためく薄手の赤いロングコート。右頬には血紅色(けっこうしょく)のトライバルタトゥーのような紋様が刻まれており、体にはピアスやネックレス、ブレスレット等のアクセサリが多々身に付けられている。そして煙草。これらを見て、彼が学業に勤しむまじめな少年と思う者など、まず一人としていまい。

事実彼はそうした反社会的な性質を持っており、ゆえにこうしていまも関係者以外立ち入り禁止の屋上へ忍び込み街を一望している。それに対する理由など特にない。敢えて言うなればヒマ潰し。面白そうだからやってみた、というだけ。しかし、それもこうして果たすと途端に飽いてしまう。終えるまでの過程こそ楽しめたものの、やり切ると鬱屈してしまうのはなぜだろうか。

これは女を落とすのに少し似ているかもしれない。落とすまでは夢中になって口説くのに、いざ女が了承すると、今度はこちらが拒絶したくなる摩訶不思議な現象(あれ)。大抵の男は――女もだが――一度くらいは経験したことがあるのではないか。

ちょうど、彼はいまそんな気分に陥っていた。こんなビルの屋上まで来て、一体何をしようというのかと。ただ帰るのが億劫になっただけ。それだけではないのかと。

彼は現在、そうした自虐の念と、そして満たされない己が欲求に飢餓していた。

――と、不意にポケットの中で何かが振動する。携帯だ。彼は億劫そうにしかめ面をしながら紫煙を吐き、やおらそれを取り出して、画面を開く。そこに表示されているのは受信完了の文字。つまりメールだ。

受信ボックスを開いて、いま送られてきたメールを確認。送信者は、知り合いの小娘（ガキ）だった。もうとうに零時を過ぎており、お子様が起きている時間ではないのだが、まあ、いまは春休み中ゆえ調子に乗って夜更かししているのだろう。それは分かる。誰もが共感する感情だ。

だが。

「……、」

苦笑が洩れる。

そのメールには、肝心の本文が書かれていなかった。ただ『事件ですっ！』という好奇心を無駄にくすぐる件名があるだけ。これでは何が何やらまるで分からない。

少年は仕方ねえな、とため息を吐きながら、電話帳を開いて送信者の少女へと電話をかけようとする。が、その直前、逆に電話がかかってきた。しかしそれは送信者の少女ではなく、また別の名前。違う女性だ。何とも騒がしい夜である。

通話ボタンを押し、携帯を耳に当てる。

すると。

『もしもし、遊路（ゆうじ）？』

どこか焦慮の色を帯びた声がすぐさま鼓膜をノックしてきた。

常人ならばそこで不穏なものを感じ取り身構えるなり何なりするだろう。しかしこの少年――久我遊路（くがゆうじ）は、相手を小バカにしている

としか思えない薄笑いを浮かべて。
「おー、どしたよ奏恵(かなえ)ちゃん、こんな時間に。夜のお誘いか？」
『……馬鹿なことを言わないで頂戴。あなたのおふざけに付き合っているヒマはないの』
一蹴。ただの挨拶代わりとしての諧謔(かいぎゃく)だったのだが、まるで相手にしてもらえなかった。
「あらら、珍しく余裕ないのね。何かあった感じ？」
『何かなければあなたに電話なんかしないわよ。――単刀直入に言うわね。また起きたらしいわ、例の事件』
「――へえ？」
空気が一変する。それまでどこかおどけるようだった遊路の声質が、陰惨な零下のそれへと変質していた。
そのことに気づいているのかいないのか、ともあれ電話の主――奏恵は先を続けた。
『襲われたのは学生五人。内三人は逃げ切ることに成功して通報してくれたようだけど、残りの二人は行方も生死も不明。私たちは取り敢えずその二人を探すから、あなたは犯人の方を追って頂戴』
「現場は？」
『三丁目の裏通り。襲われたのはつい三〇分ほど前らしいから、まだそう遠くへは行っていないと思うけど……』
「りょーかい。それで十分だ」
そう言って、通話を切る。
狩人というのは、一度定めた獲物を決して逃がしはしない。が、それでも逃げられてしまった場合は、別の獲物でその穴埋めをする。狩人にとって獲物は獲物であり、それ以外の何物でもないから。ああ、つまり種が同じであればそれでいい、ということだ。人間も獲物の個性、特徴など、余程のことでもなければそう気にはすまい。それと同じ。
すなわち、その理屈で言うならば、いまこの瞬間にも街のどこかで誰かが理不尽な絶望を味わっているということになる。それを知

りながら、しかし彼は微塵も同情などせず、義憤もしない。そんなことは己の知ったことではないから。

久我遊路が興味を持つものは、たった一つ。

「今夜の獲物（オモチャ）は、どのくらい遊べんのかねえ……？」

その顔にはもはや鬱屈の色はどこにもなく。

ただ――抑え切れない喜悦の念を表した、引き裂けたような狂笑だけが浮かんでいた。

第一話

人生において、人がもっとも輝きを放つ瞬間とは、やはり死する刹那だろう。

たとえば、重篤（じゅうとく）な病を患い余命いくばくもない人間がここにいたとする。そんな人間が、己が運命に悲憤慷慨（ひふんこうがい）するのではなく、懸命に生きて――そして逝く様は多くの人々に感動を与えるのではあるまいか。否とは言えまい。事実そのような人間を題材とした物語は数多く存在するのだから。

限られた時間を生きるからこそ、その死（おわり）は美麗なものとなる。そしてそれは、物語の中でのみ通用する概念ではない。現実でも、立派に生き諸人を魅了した偉人たちは数多くいよう。人々の生きる指針となった者らは幾多といよう。

であれば、やはり死は美しい。

そう思うのに、この時世、それを見る機会は極端に限られている。特にこの平和ボケした日本という国にいるのなら、殊更に。

ゆえに、彼女――比良坂黄泉（ひらさかよみ）は、いままさに死に呑まれかけんとしている者に手を差し延べはしなかった。

「あ、がっ……た、頼む……助けて、痛いんだよ……っ」

眼下から、呻吟（しんぎん）と懇願が入り混じった声が聞こえてくる。

冷たい地に伏しているのは、二〇歳そこらの青年。一体何があったのか、全身傷だらけで血に塗れている。トラックにでも轢かれたのだろうか。

そんなことを思いながら、黄泉はガードレールに腰かけ先程向かいにある自販機で購入したコーヒーを一口。青年の必死の願いにも、まるで意に介していない。ただその深淵のような無感情の黒瞳（こくどう）で彼を見下ろしている。

「は、あ……誰か、助けて……」
もはや黄泉にどれだけ乞うても無駄と判じたのか、青年は他の者に救済を願い始めた。が、時刻はとうに零時を過ぎている。加え、最近この街――御門（みかど）市では無差別連続殺人という物騒極まりない事件が頻発しているのだ。ゆえ、人気が失せたこのような時間に出かける者などほぼ皆無だろう。
「ああ……」
と、そこで黄泉は思い至ったように。
「おまえ、例の殺人鬼にやられたのか？　災難だったな」
まさに他人事のように訊ねた。
しかし青年は、弱々しく首を横に振って。
「ば、化物、に……」
とそう返答してきた。
化物。化物？　と黄泉は小首を傾げる。件の殺人鬼は、人間ではないというのか。なるほど、最初の事件から一月経ったいまもまるで警察が成果を挙げられていないのは、そういう理由からだったのか。
「へえ……化物が相手じゃ、警察も大変だな」
どうでもよさそうな口調で呟く黄泉。けれど、彼女とてこの街にいる以上いつ襲われるやも知れない身だ、決して他人事ではない。
が、それでも黄泉は動じない。殺人鬼・化物が潜む街。時刻はそれらが活発になりそうな闇の時間。そしてそれらに襲われたという瀕死の青年が一人。そんな常人ならば恐怖でパニックに陥りそうな状況に立たされているというのに、微塵も心を乱さないのは一体どういうことなのか。
それは言うまでもなく瞭然。
彼女が死を是とし、美と認識しているから。ゆえ、恐怖という感情が無いのだ。
端的に言ってしまえば、人として壊れている。つまり異常者というやつだ。そんな人間に共感を求めても徒労に終わるだけ。

この青年が不運だと言うのなら、化物に遭遇してしまったことより、後に出逢ったのがこの生粋の死神たる彼女だったことがそうだろう。他の誰かならば、助かるかどうかは別としても、救うために動いてくれたろうに。

「あ、は……づっ」

ゴボ、と口から血の泡が零れ出る。もはや彼の死は秒読み態勢に入ったと、医学知識のない素人の黄泉ですら容易に見て取れた。

しかしやはり黄泉は何もしない。ただただ苦しむ青年を観察――観賞するように見ている。もはや彼に救いなどないだろう。もう半刻と持たぬだろうが、その最期の時まで嘆き続けるしかない。ああ、もしも霊というものが世に存在するのだとしたら、こうした者がそうなるのだろう。

だが、運命の悪戯か、あるいは神の慈悲か、奇跡は起こった。

「ん？」

サイレンの音が遠くから聞こえてくる。しかもその音がこちらへ近づいてくる。偶然、ではないだろう。ここには化物に襲われた負傷者がいる。その事件をどうやってか知ったとなれば、警察が黙っているはずがない。

黄泉はぐいっと一気にコーヒーを飲み干し、向かいに設置されている自販機、その隣に置いているゴミ箱へ缶を投げ入れて。

「じゃあ、私は行くよ。達者でな」

腰を上げ、その場から離れる。別段疾しいことなどないのだが、事情聴取だの何だのと警察に拘束されるのは御免だ。面倒臭い。

「あ……ぐ、あ……ま、待っ――――」

去り際、微かに聞こえていた呻き声が唐突に止んだ。

それでも、彼女は振り返らなかった。

瀕死の青年がいた場所から道なりに一〇数分歩いたが、その間誰一人として見かけることはなかった。街は凍りついたように静まり

返り、悄然（しょうぜん）とした空気が満ちている。まさに死の街そのものの様相を呈（てい）していると言えよう。

（……化物、か）

あの青年は言っていた。化物に襲われたと。

普通に考えれば、重傷を負い錯乱していたがゆえの戯言――そう取るのが自然だろう。人は未知なるものを求めながら、自分に害する未知だけは頑なに認めようとしない生き物だから。

それは恐怖から生じた感情。誰もが持つ自衛の願望（こころ）。しかし、前述の通り彼女にはそのような感情（もの）が無い。ゆえに、信じたとまではいかないまでも、頭ごなしに否定してはいなかった。というより、どちらでもいい、どうでもいいと思っている。そんなものになど、比良坂黄泉は微塵の興味もないから。

彼女が関心を持つのは、たった一つだけ。

しかし、その願望は人類という種の大半に受け入れられないもの。ゆえに、彼女は常に無聊していた。特にここ一〇年はそうだ。誰一人として、彼女の存在を認可した者はいなかった。というより、比良坂黄泉という人間が生まれて一八年、その間彼女の存在を認めたのは、たった一人の少年だけだ。

実は彼女、一度この街からちょっとした事情で離郷しており、そして帰郷したのがつい一月半ほど前。つまり、ちょうど彼女が戻った直後辺りに、この連続殺人が起こり始めたのだ。不幸と言えば、不幸だろう。彼女は特に何も感じていないが。

ともあれ、事件が起きてなお彼女がこのように出歩いているのは、一〇年前唯一彼女を認め、そしてその在り方に共感し合えた少年を探しているがゆえ。

だが、一〇年振りに帰郷し、いの一番に彼が当時住んでいた自宅へ訪れてみれば、そこには別の家族が住んでいて、当の本人は未だ行方知れず。もしかしたらもうこの街にはいないのかもしれない――というより、家を売り払っていることを考えれば、そうと考えるのが自然だろう。

しかし、それでも彼女は探していた。別に彼に恋慕していたわけではないが、会えるものなら会いたいと思っている。……まあ、やることがないから、というのが第一の理由なのだが。

「……あいつは、どこにいるんだろうな」

そして何をしているのか。

一〇年前の彼ならば、いま街を騒がせている殺人鬼にも恐れず関わろうとするだろう。あの少年はそういう怯懦（きょうだ）とは無縁の、危険嗜好の性質を持っていた。ゆえに、黄泉は敢えて殺人鬼が動きだしそうな夜間の散策を行っているのだが――結果はご覧の通り。さすがに辟易してしまう。

小さくため息を吐くと、不意に視界の端にコンビニが見えた。立ち止まってしばし黙考し、ややあって気分転換に何か適当な飯でも買おうと決を出す。いわゆる一つのヤケ食い、というやつだ。

無人の道路を横断し、コンビニに入る。暗闇に目が慣れていたせいか、店内の照明がいささか眩しく、そして外界の不穏さを笑い飛ばすような軽やかなＢＧＭが流れている。ああ、ある意味では、ここは年中無休で人々に日常という普遍の安堵を与える憩いの場なのかもしれない。

さて、と黄泉はまず軽く店内を見渡す。特に意味はない。何となくだ。しかし、黄泉はその何となくから先の行動をしなかった。否――できなかった。

なぜなら――店内の至る所に飛び散っている鮮血が見えたから。

天井、床、壁――入り口からでも見えるほど広範囲に飛散しているそれは、紛れもなく人の血、それである。仮に凶悪な強盗犯が現れ殺人に踏み込んだのだとしても、こうはなるまい。ゆえにこれは異常。常識（セカイ）から逸した、魔的な光景。

しかし。

「……」

無言。常人ならば悲鳴を上げて然りのはずだが、けれど黄泉は悲鳴どころか表情すら変えることはなく、ただ泰然と佇立していた。

ほどなくして、ゆっくりと黄泉が動き出す。急くでもなく、躊躇するでもない、自然な足取りで奥へと進んでいく。
すると、何かを噛み砕くような、そんな音が聞こえてきた。いや、砕く音だけではない。何かを引きちぎるような音もまた。
まともな神経の持ち主ならば、ここで引き返すことを選択しただろう。あるいは警察に通報するか、もしくは真相を確かめんと恐怖に耐えて進むか、そのいずれかだ。それで言うなら、黄泉が選んだ選択肢は三つ目ということになる。だがしかし、どういうわけか、歩を進める度に無であった彼女の表情が、恐怖ではなくどこか笑みの形に歪んできているような……
そして。
彼女は、『それ』と遭遇する――
「……、ア？」
血だまり。その中で、血塗れの肉塊を抱きしめるようにして貪る、人間――のような姿（カタチ）をしたモノがそこにいた。
「ナンダァ、オマエ？　ダレダァ、テメエ？　ナニシニキヤガッタ？」
爬虫類のような無機質な金色の瞳が黄泉を捉える。口元は血でベットリと濡れ、爪牙は人間のものとは思えない、さながら獰猛な肉食獣の如く鋭利。そしてその肉体は筋骨隆々たる毒々しい黒々とした体表。そのような異形の『それ』が喰らっているのは、原型こそ留めていないものの、けれど間違いなく人間（ひと）であった。
さて、これらを踏まえて、果たして『それ』を人間であると思える者はいるだろうか。いやいまい。いるはずがない。如何な痴愚（ちぐ）であろうと見紛わないだろう。黄泉もそうだった。これは人ではない――化物、怪物、妖魔の類であると。
「ソウカ……オレヲコロシニキタンダナ……アノカタノチョウアイヲウケテイルオレヲネタンデッ！！」
妖魔が吠える。その瞳に宿るは激甚な憎悪。いや――あるいは恐怖か。凄まじい被害妄想に捕らわれている魔性の怪物は、ゆえに視

界に入った人間(てき)をそこの肉塊のように殺してきたのだろう。ああ、もしかしたら先程出会った青年、あれもこの妖魔にやられたのかもしれない。そして今度は己の番。

しかし、それを理解した上で黄泉が見せた反応は……

「へえ……滓徒(しと)か。ほとんど壊れてはいるけど、最低限機能はしてる……なるほど、件の殺人鬼の正体は、凄腕の魔術師ってわけだ」

まるでちょっとした謎を解き明かした子供のような、そんなしたり顔を浮かべていた。

それに、妖魔は。

「コロス……コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス――オレヲコロソウトスルヤツハ、ドイツモコイツモブチコロシテヤル――――ッ！！」

響き渡る絶叫にも似た咆哮、その凶念の波動が残らず店のガラスを砕き陳列棚を薙ぎ倒した。が、しかし黄泉は仰け反らない。如何な暴風にも揺るがぬ不動の巨木の如く、彼女は微塵も気圧されていなかった。

その顔に浮かぶは喜悦の笑み。どこまでも淫靡(いんび)でおぞましい、魔性の微笑。

仮にこの場に第三者がいたとするならば、果たして一体どちらを化物と呼んだであろうか。

――妖魔が雄叫びを撒き散らして突貫してくる。

それはさながら巨大岩石の驀進(ばくしん)。ゆえに、人間の柔な体であれを食らえばひとたまりもない。ただ惨たらしい轢殺(れきさつ)死体と化すのみ。

だが黄泉は逃げず動かず、ただ自然体のまま――

「――無間乖離(むげんかいり)」

死(おわり)の言霊を紡いだ。

第二話

魔術師とは、狂おしいばかりに求めてやまない己が願い、祈りを顕す魔術なる術を会得した者らの総称。ああ、それは信仰によって奇跡を為す祈祷師（きとうし）と酷似した能力と言えよう。だが唯一にして決定的に異なる点は、彼らが神や精霊などという絶対の上位者を信奉するのではなく、ただ己の至上性のみを信ずる狂信者であることだ。

世界（かみ）が敷いた法など知らぬ。この己れが定めた法理こそ至高――それが彼らの共通認識。ゆえに、魔の術を揮う者と彼らは呼ばれている。

そして、その異端者がここに一人――

「……」

比良坂黄泉（ひらさかよみ）は無言で『それ』を見下ろしていた。

そこに先程までの喜悦の色はない。まるで興味のない玩具を見つめる子供のような、そんな無感情の瞳。その視線の先には――血の海に沈む、黒い肉片。

塊と呼べるものなど一つとしてない。文字通り微塵となったそれは、けれど間違いなく数瞬前まで猛り狂っていた妖魔だ。

それがいま、刻まれ血に沈んでいる。そしてそれを為したであろう張本人たる彼女は、しかし先の位置から一歩も移動しておらず、且つ指一本動かしていない。

ただ死ねと。そう彼女は念じただけ。それだけで、人外の怪物はこのような無惨な肉片となり果てたのだ。

ならば彼女は化物――それでは足らぬだろう。死神。まさにそう呼ぶに相応しい存在である。

と、妖魔――その残骸が、突如蒸発するように消滅していく。が、黄泉はもはやどうでもいいとばかりにそちらを見向きもせず。

「どうするか……店員いないし、勝手に持ってくのもまずいだろうしな」
などと、妖魔の異変より買い物の成否の方に意識を向けていた。彼女の中では、あれらのような怪奇存在よりも買い物ができないことの方が遥かに衝撃（インパクト）のある事柄だったようだ。
どうするか、と黄泉はしばらく店内を歩き回って黙考し、やがて諦めたように外へ出た。別に持って行っても構わなかった――彼女の中では――のだが、そもそも気分転換が目的であったゆえ、盗人の真似事までして欲しくはなかったのだ。そんなことをしたら、後々忸怩（じぐじ）の念に苛まれることは明瞭だったから。
さて。時刻はすでに深夜二時を過ぎている。如何に異常者たる黄泉と言えど、睡魔というものはむろんあり、いつまでも抗えるものでもない。ゆえに今夜はこのくらいにして、そろそろ帰るべきか。
そんなことを考え始めていると。

「――へえ。あの下賤（げせん）な狗共の他に、まだこの街に魔術師がいるなんてね。一体何者よ、あんた？」

鈴のような、それでいて力強い凛とした声が何処からか飛んできた。
黄泉が声のした方へ視線を放ると、道路脇の一本の電柱、その上に少女が優雅に座しこちらを見下ろしていた。
左右に結われた赤い髪と、華奢な身体を包む漆黒のドレス。年の程は一四、五と言ったところで、まだ幼さが抜け切っていないその愛らしくも端麗な面相は、けれど零下の笑みによって怖気の走る凶顔（きょうがん）と化していた。余程の愚物でもない限り、この少女が見た目通りの娘だとは思わないだろう。
「よ」
そんな気の抜けた声を発し、不意に少女が電柱から飛び降りる。優に一〇メートルを越える高さからの降下にもまるで恐怖を感じて

おらず、落下の衝撃すら意に介していない。まさに舞い降りるかの如く華麗に着地を済ませた。
そして、その宝石のように美しい紺青の瞳をこちらに向けて。
「ねえ、何者なのよって訊いてるんだけど、どうして答えないの？　あのクズ共の仲間だから？　警戒しているから？　それとも――無視してるの？」
少女の眦（まなじり）がわずかに引き絞られる。それだけで、気温が一気に下がったような錯覚に見舞われた。
「……」
だが、黄泉の表情に変化はない。明らかに尋常ではないと分かる存在と相対しているにも拘わらず、その心はなおも不動。その理由は一つ。
目前の少女が何者なのか、すでに彼女は看破していたから。
しかし、それは別段黄泉の洞察が優れているというわけではない。魔の道を行く者ならば皆等しく気づいたであろう。
――この少女が、魔術師だということに。
だが、それを察しながらも、黄泉は微塵も臆することなく。
「別に。ただの通りすがりだよ。で――いいか？　もう行っても」
「……やっぱ舐めてるわよね、あんた」
少女の表情にわずかに険の感情（いろ）が浮き出る。それはすなわち、お前を殺すという絶対の殺意の表れ。
少女が魔術師であると黄泉が見抜いたように、この少女もまた、比良坂黄泉が魔術師だと看破している。ゆえ、本来ならば彼女たちが互いが互いをそうと判じた瞬間に争いが起こっても何ら不思議ではない。異なる飢えた肉食獣を一つの檻に入れたらどうなるか――問うまでもなくそれは瞭然だろう。これは、そういう話。
そして、黄泉はその危ういながらも成り立っていた均衡を、たったの一声で崩してしまったのだ。
ならば、これから先起こることは全て既定と言えよう。
「その余裕面がどこまでもつか、見せてもらおうじゃない」

少女が手を虚空に掲げる。するとその直後、掌で爆ぜるような閃光が迸り（ほとばし）――刹那の間に一振りの長剣が現出した。
三日月のように湾曲（わんきょく）した刀身で、全長は七、八〇センチ程度の片刃剣。重量は定かではないが、けれどこのような戦の凶器、少女の繊手（せんしゅ）では自在に振るえないことは自明だろう。
だがしかし、少女は苦もなく軽々と片手一本でそれを肩に担ぎ。
「はぁっ！」
明瞭と言うのもおこがましいほどの間合いの外からそれを振るった。
むろんそんなものが届く道理などない。ゆえに、その剣戟はただ弧の軌道を描くのみに終わった――と黄泉が判じた、その瞬間。
あり得ない軌道、あり得ない伸長でもって剣戟が彼我の距離を潰し襲いかかってきた。
「――――、っ」
瞬時に身を翻す。その超反応は人間離れしていたが、しかし完全には避け切れず、黄泉の頬に一本の赤い線が刻まれた。
それは文字通りかすり傷。けれど、人外の化物ですら触れることも能わなかった比良坂黄泉に、不意打ちとは言え傷を付けたこの少女は、間違いなく先の妖魔より格上の存在と言えるだろう。
「……蛇腹剣（じゃばらけん）、か。また珍妙な代物を取り出したもんだ」
手の甲でぞんざいに血を拭いながら、何事もなかったかのように黄泉は先程の不可解な現象を起こした少女の剣、その正体（な）を口にした。
「あんたも、よく躱せたじゃない。大抵の奴なら今ので終わってたのに」
言って、少女がゆっくりと剣――蛇腹剣と呼ばれたそれを振り上げる。すると、所有者たる少女の意志に応じるかのように、途端にその形状が変化した。
それはまさに蛇腹の如く。無数に分割された刃が、ワイヤーによって連結され鞭と化している。なるほど、確かにこれならば間合い

は一気に拡大し、且つ不意も突ける。剣と鞭の二重属性を有する近中間距離に適したそれは、扱いこそ難しいが、けれど使いこなすことさえできれば強力な武器となるのは間違いないだろう。
しかし、蛇腹剣なるものは克服し難い欠陥を持っているため、実際に作ることは不可能であり、想像上の武具とされている。ならば、これは――
「……孤人幻装（こじんげんそう）。願望の具現因子、か」
黄泉が呟く。
孤人幻装――それは己が祈りを具象させる魔術とは異なり、自身の願いを叶えるための要素（ファクター）、魔術を発動するための儀式道具である。
ゆえに常識などまるで通用しない。これは幻想という超常の域にある秘具（アイテム）なのだから。
「――さて。まさかとは思うんだけど、たった一太刀避けた程度で勝てる――とか思ってたりしないわよね？」
すでに勝利を確信しているかのように、上位者の言を投げる少女。
対する黄泉は、悲嘆するでも憤激するでもなく、ただため息を吐いて。
「おまえ、少し黙った方がいいぞ」
「――――――」
少女の顔が笑みのまま凍りついたように硬直する。予想だにしない返答に、脳が思考を止めたのだ。が、黄泉はそんなことに気など払わずさらに続ける。
「自分を大物に見せたいんだろうけど、こんなかすり傷一つ付けただけでそんな得意げな顔したら、全部台無しだ。ただでさえそんな姿（なり）してるんだから、無駄口叩くと余計小物に見える」
「な、にを……」
言っているんだ、と少女が掠れる声で訊ねる。
お前はいま命を狙われているのだぞと。殺されかかっているのだぞと。
なのにどうして――そんな物知らずな子供を諭しているようなの

だと。
少女は、そう問うた。
それに、黄泉は平然と。
「子供が好きなんだよ、私は。年不相応に背伸びしてる子供は、特にさ」
「っ――――！」
少女の顔が憤怒へと瞬転(しゅんてん)する。
雑魚と思っていた相手に敵とすら認識されていなかったその屈辱に耐えられるほど、少女の精神(こころ)は寛容ではなかった。
「舐めてんじゃ――ないわよォッ！！」
叩きつけるように、少女が蛇腹剣を揮う。
刃が分割され、剣が鞭へと変質し蛇のような――否、荒れ狂う龍の如く不規則な軌道で黄泉を殺さんと迫る。
だが、対する黄泉はあくまで泰然。死の恐怖など微塵も感じていないかのような落ち着きぶりだ。何か手があるのか、はたまた死を恐れていないだけか。
その答えが出る、刹那の直前――

――銃声が、轟いた。

「なっ――――」
少女が驚愕に目を剥く。その理由は明快。
黄泉の首を喰い千切らんとしていた龍の剣(あぎと)が、甲高い音を発し何かに弾かれたからだ。その？何か？の正体、言うまでもないだろう。銃弾である。
つまり、己は邪魔をされた――
「っ……、だれ！？」
そうと判じた少女が、三白眼の形相で吠える。
向けられた視線は、路地裏へと続くビルとビルの間の裏道付近へ。
その凶眼(きょうがん)の先に――彼はいた。

「お〜、おっかねぇ。そう怒鳴んなよ、アイサツみてえなモンだろうが。器が知れるぜ？　お嬢ちゃん」

場の空気を度外視した緊張感のない、それでいて相手を小バカにするような声が響く。それに反応を示したのは、やはり虚仮にされた少女だった。

「……そんな所に隠れてないで、こっちに来なさいよ。それとも……姿を晒すのが怖いのかしら？」

「ハッ。余裕ねえなァ、ほんと」

くっくっと可笑しそうにせせら笑いながら、ゆっくりと声の主がこちらへ近づいてくる。けれどそれは少女の挑発に乗せられたからではない。最初から隠れているつもりなどさらさらなかったから。でなければ、己の存在を示すような愚行を誰が犯すだろうか。

電灯の陰から照らされた戦場（こちら）へ。闇の帳（とばり）を剥いで露わとなった声の主の正体は、黄泉と変わらない年頃の、けれどなぜか白く塗れた髪をした少年だった。

彼を視認すると、少女はより一層その顔を強張らせて。

「やっぱり現れたわね。薄汚い狗が」

「あ――？　狗はテメェだろ？　ご主人様に調教されて、何でも言うこと聞いちまう雌犬なんだから」

「こ、のっ……！」

「ン？　何だ、鶏冠（とさか）にきたか？　ハハッ、沸点低いねえ。やっぱお子様だ、もう癇癪（かんしゃく）起こしちまったよ」

露骨に過ぎる煽動の言を吐く少年。それにまんまと釣られ、少女の瞳が赫怒に燃える。もはやその怒りを抑えることは不可能だろう。少なくとも、二桁以上の命を嬲（なぶ）らねば。

しかし少女はそんなしち面倒な真似はせず、もっとも単純且つ明快な方法を選んだ。

「……いいわ。いいわよ、上等よ。あんたたちここでまとめて殺し

てあげる！」
少女が蛇腹剣を手に食い込ませんばかりに強く握り締めて咆哮する。掌からは血が滲み滴っているが、けれど少女は微塵も意に介していない。いまの彼女には、痛みなど些事以外の何物でもないのだろう。
だが、それほどの憤激を呼び起こした彼はというと。
「あーらら。オレら殺すってさ、どうするよ？」
いつの間に黄泉の傍へ忍び寄っていたのか、嬉々とした楽しそうな口調でのんきに訊ねた。
「さあな。取り敢えず一発殴られてきたらどうだ？　怒らせたの、おまえだろ」
「あぁ？　なーに責任全部オレに押し付けてんのよ？　オレが来る前から十分キレてたろ、あの嬢ちゃん」
「私は何もしてないよ」
「うっは、無自覚かよ。タチ悪りぃ～」
肩を竦めて野次る少年。なるほど、確かに無自覚の悪意こそが何よりも迷惑だと言うが、さりとて自覚ありの悪意もまた同様に害だ。ああ、つまりはこの二人、五十歩百歩である。
それが証拠に、
「何が可笑しいのよ、ゴミ共がァッ！！」
少女の怒気は一向に鎮静されていない。むしろ悪化しているようにさえ思える。
だというのに。
「はいはい、りょーかい分かりましたよー。相手してやるから、ンーながなんなって」
少年はなおも挑発の言を飛ばし、黄泉はもはや興味が失せたのか、星空などを眺めていた。
「殺す――殺す殺す殺す殺す殺す殺してやる――ッ！！」
殺意に塗れた声が夜闇に響き渡る。
そして。

「真正（アルカナ）――」
少女がいままさに魔術を発動せんとした、その瞬間――
「え――――？」
毒気を抜かれたような、そんな頓狂（とんきょう）な声を少女は洩らした。
「……、」
先程までの憎悪が嘘だったかのように少女は沈黙する。その瞳には怒りではなく怪訝の色が浮かんでおり、やがて悲鳴にも似た声を上げて突如叫び出した。
「な、んで……どうして、なぜ退けとおっしゃるのですか！？　ここでこいつらを見逃す手はありません、必ずや私が討ちますから、だから――」
信じてくれと、任せてくれと、そう少女は居もしない誰かに乞うた。
だが、数瞬の間を置いて少女は時が止まったかのように静止し、ややあって憤懣（ふんまん）の態を見せた。それが、少女が問いかけた何者かの返答を言葉以上に如実に表していた。
「……っ、……！」
少女は怒りのあまり総身を震わせ、歯を砕かんばかりに軋ませ、一〇代半ばの小娘とは思えない恐ろしい悪相で黄泉と少年を睨みつけ。
「あんたたちは私が必ず殺すわ――覚えてなさい」
そう言い残し、人間とは思えない異常に過ぎる速さで瞬く間にその場から離脱していった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9109y/

幻想のアルカナ

2011年11月30日15時53分発行